【論　文】

# 『オデュッセイア』における テレマコスの旅

松本仁助

本論は、「オデュッセイア」におけるテレマコスのピュロスとスパルタへの旅（三歌・四歌）を、統一論的立場から、解釈しようとするものである。それには、一歌、二歌がともに同一の作者によって創作され、三歌、四歌も一歌、二歌の作者によって作られたということが証明されねばならない。ところで一歌、二歌が同一の作者によって作られたということについては、すでに筆者によって述べられている。[1] それを前提として以下に三歌、四歌をあつかうことにする。

## I

テレマコスが、ピュロスとスパルタにおもむくのは、父オデュッセウスの消息を尋ねるためであることは、一歌のアテネの「提案」（一、九三―九五）およびアテネの「忠告」（一、二八四―二八六）からあきらかである。だが実際は、シュヴァルツ[2]が指摘しているように、たとえば、ネストルは肝心な点に関係のない事柄を語っているが、これは、テ

レマコス物語を作った作者が、テレマコスを叙事詩によって彩られたトロイア征服者たちの輝やかしい世界に導入するためであるという意味のことを言っている。またベーテ[3]は、三、四歌ではギリシア軍の帰国が主要な物語であり、ただこの物語が語られる機会が得られるようにテレマコスの旅が作られたのであるというふうに見ている。

これら分析論者たちの批判は、一見当然のように思えるだろう。というのは、ネストルは、オデュッセウスの消息を全く知らず、メラネオスも、プロテウスから、オデュッセウスがカリュプソのもとにいると聞いたことを、テレマコスにつたえているだけであり、それ以外は、両者とも、ながながとギリシア軍の帰国のことを述べているからである。

だがはたして、三、四歌におけるテレマコスの旅は、分析論者の言うように、彼にとって無意味であり、聴衆にギリシア軍の帰国を語るための方便に過ぎないのだろうか。クリングナー[4]は、テレマコスの目的がわずかにメネラオスの報告によって達せられているのに違いないが、オデュッセウスとテレマコスの直接の関係のみが考慮されるだけでは、この独特な作品は理解されない。むしろこの場面においては、あからさまでない指摘、つまり間接的、暗示的な親子の接近が示されていると見ており、この点から三、四歌を統一論的に解釈している。このクリングナーの立場からなされている解釈は、説得力のあるものであり、異論をはさむ余地はないと思われる。

しかしピュロスとスパルタへの旅が、あくまでテレマコスに父親の消息を求めさせ彼に名誉をもたらすというアテネの意図のもとになされているという前提において、三、四歌のネストルとメネラオスの場面を、分析論者の言うような、改作者が主として「ギリシア軍の帰国」を述べることに利用しており、「オデュッセイア」の筋の自然な展開をそこねているのかどうかを検討して見ようと思う。

まずメントルに変身したアテネにつきそわれたテレマコスの一行がピュロスに着いたところ（三、一―六四）から見てみよう。彼らがピュロスに到着すると、海辺に大勢の人々が集まり、ポセイドンに犠牲をささげていた。この時アテネ＝メントルはテレマコスに、父親の消息を尋ねるために、海を渡って来たのだから、はずかしがらず[5]にネストルのところへ行き、本当のことを聞かせてもらうよう自分で頼め（三、一四―二〇）と言う。するとテレマコスは、挨拶の仕方がわからず、話すことにもなれていないから、年長者に尋ねるのははずかしい（三、二二―二四）と言う。そこでアテネはもう一度、彼自身でそのようなことがわかるように、神も助言してくれるだろう（三、二六―二八）といい、アテネが先立ってネストルと息子たちが家来たちに囲まれて坐っているところへ行くと、テレマコスも彼女について行った。彼らを見て、ネストルの息子ペイシストラトスが出迎え、二人をネストルのそばに坐らせ、ポセイドンに祈ってください（三、四三）と言って、まず年輩のアテネに杯を手渡した。アテネは、それを受け取り、ポセイドンは、ネストルと息子たち、すべてのピュロス人に誉れを与え、さらにテレマコスと彼女がピュロスに来た目的を成し遂げ、無事に帰国できるようにしてほしい（三、五五―六一）と祈りながら、自分ですべてを成し遂げようと思っていた。そのあと彼女は、テレマコスに杯を手渡すと、彼もおなじように祈ったのである。

以上の紹介において、まず気がつくことは、ネストルらがポセイドンに犠牲をささげており、アテネとテレマコスが彼らとともに祈り、ピュロスに来た目的を遂行しようと決意していることである。つぎに気づくことは、テレマコスが、アテネ＝メントルによって、自分で長老のネストルに挨拶するすべを考え、父親の消息を自分で頼むように指示されていることである。前者は、一歌の神々の会議において、アテネが、オデュッセウスにたいするポセイドンの怒りをやめさせて、オデュッセウスを帰国させるよう提案していることにうまく対応していることを示しており、後

者は、ピュロスとスパルタへの旅においてテレマコスに名誉を得させるというアテネの意図が実現される端緒を示している。このように見てくると、三歌のはじめの場面が、一、二歌と関連を持っていることがわかるだろう。

## II

さてポセイドン（ネストルの先祖、一一、二五二）に祈りをささげ、食事をともにしたテレマコスとアテネに、ネストルは、彼らが誰であるのか尋ねた[6]（三、六五―七四）。この問いにたいしてアテネによって勇気を与えられた思慮深いテレマコスは[7]、彼の故郷はイタカで、父親の消息、いや父親のあわれな最後を教えてもらうために来た故真実を述べてくれ（三、七五―一〇一）と言った。

これにたいしてネストルは、まずトロイアにおいて大アイアス、アキレウス、パトロクレス、彼の息子アンティロコスらが戦死したこと、オデュッセウスは、九年間の戦争の間、策略すなわち知においてはるかにすぐれており、テレマコスの話し方がこのオデュッセウスによく似ていること、戦争の間、彼とオデュッセウスの意見がいつも一致していたことを述べる。つぎにトロイア陥落後、アテネの怒りによってアガメムノンとメネラオスが不和になり、ギリシア全軍の意見が二つに別れ、一方は、アガメムノンとともにトロイアにとどまってアテネに犠牲をささげた後帰国することになり、他方は、ネストルとともにただちに帰途についたが、途中テネドスからオデュッセウスはアガメムノンのもとにひき帰したこと、しかしネストルはディオメデスとともにそのまま祖国への航海をつづけ、レスボスに着く、そこへメネラオスが追いついたこと、その後彼らは海原を渡り、ディオメデスはアルゴスに、ネストルはピュロスに無事帰国したことを述べ、ギリシア人のうち誰が死に、誰が無事に帰ったのか知らないのだ（三、一〇二―一八

五）と言う。ただ彼がピュロスで聞いたこととして、ネオプトレモス、ピロクテテス、イドメネウスが無事に帰国したこと、とりわけ、テレマコスも知っているだろうがとことわりながらアガメムノンは無事に祖国に帰ったのに悲惨にもアイギストスに殺害されたが、アイギストスもアガメムノンの息子オレステスによって復讐されたことを述べ、息子を持っているのはすばらしいことだといい、テレマコスも後世において名誉を得られるよう勇敢であるように（三、一八六―二〇〇）と、はげます。

以上が、テレマコスのオデュッセウスについて真実を述べてくれと頼んだネストルの返事である。要するにネストルは何も知らないのである。それ故分析論者たちが、この長いネストルの話を、「ギリシア軍の帰国物語」の一部にすぎず、テレマコスの質問にふさわしくないと見なしているのも、一見無理はないように思われる。だがはたしてそうだろうか。アテネ＝メントルにつきそわれたテレマコスの真実を述べてくれという願いに、長老のネストルたる者が、自分は何も知らないのだという答えだけですませるものだろうか。彼なら、すくなくとも知ることが出来なかった事情を十分説明したうえで、何も知らないのだと答えるべきだろう。さらに遠路イタカから尋ねにきたテレマコスにたいしては、テレマコスがオデュッセウスに似ており、そのオデュッセウスが知においてすぐれていたことをほめたたえ、帰国後知った将軍たちのことをつたえたうえ、アガメムノンの死とオレステスの復讐を述べて、名誉を得るよう勇敢であるようにとはげましているのも、思慮深いネストルの当然の配慮と言えるのではなかろうか。

このように見てくると、三、一―一〇一においては、一歌のアテネの意図に合致した言動が、アテネとテレマコスによってとられており、ネストルも、帰国に際して何も知ることができなかった事情や、知にすぐれたオデュッセウスとオレステスの復讐を述べる（三、一〇三―二〇〇）ことにより、一、三二五―三二七およびアテネの提案すなわち

彼女の意図に見事な対応をしていると言えるだろう。

ところで、ネストルが、オレステスの復讐をほめ、テレマコスも勇敢であるようにと言われて、彼は、横暴な求婚者たちを罰する力を神々が与えてくれればよいが、神々は父親にも自分にもこのような幸運を授けはしない（三、二〇二―二〇九）というような悲観的な言葉を述べる。このテレマコスの言葉で、ネストルは、イタカにおける求婚者たちの悪行を思い出し、オデュッセウスが帰国して、彼らに復讐するかも知れない。またトロイアで、アテネが、オデュッセウスに好意をしめしたように、テレマコスにも助力してくれれば、求婚者たちには結婚のことなど思いもよらないことになろう（三、二一一―二二四）と言ってテレマコスを勇気づける。しかしテレマコスは、そのようなことはけっして成就されないし、自分が希望し、それがたとえ神々の意志であっても、そのようにはならないだろう（三、二二六―二二八）と、すっかりあきらめきったことを言う。そこでアテネ＝メントルは、テレマコスに、神には、男がたとえ遠くにいようとも、彼を無事帰国させる力がある。アガメムノンのように、帰国しても、アイギストスと自分の妻の策略によって死ぬよりも、[8] 多くの苦難に耐えた後でも無事帰国するほうがよいと思う。だが人間はすべて死をのがれられないのだから、死の運命がおそえば、神でも、その愛する男に死を防いでやることはできない（三、二三〇―二三八）という意味のことをいい、オデュッセウスの帰国をあきらめないようにさせようとする一方、人間は死すべきものであると述べ、たとえオデュッセウスが帰国しなかった場合でも勇敢に振舞うよう示唆している。

そしてこのような対話は、一歌のアテネ＝メンテスとテレマコスの対話、すなわち無気力で悲観的なテレマコスをアテネが勇気づけようとしても、テレマコスがなかなか気力をしめそうとしなかった場面（一、一五八―二五一）を想起させるだろう。だが三歌のこの場面では、テレマコスは、すでに「忠告」で勇気を与えられているうえ、ネストル

と話すためにアテネによって再度勇気づけられているから、求婚者に対処する彼の悲観的な気持（三、二〇一―二〇九）やあきらめの感情（三、二二六―二二八）も、ネストル（三、二一一―二二四）やアテネ（三、二三〇―二三八）のはげましによって除かれ、彼はすぐに気力をとりもどしているのである。つまりテレマコスは、それだけ早く自己の弱さを克服する力を持てるようになっていると見てよいだろう。

それ故、このようなテレマコスは、アテネのはげましに、オデュッセウスはすでに死んでしまって帰国しないだろうから、彼のことはもう話さない（三、二四〇―二四二）というふうに答え、正義と思考にすぐれたネストルに、アガメムノンは、どうして死んだのか。メネラオスは、どこにいたのか。アイギストスは、自分よりはるかにすぐれた男アガメムノンを殺害したのだから、彼にたいしてどのような破滅を企んだのか。メネラオスは、アルゴスにはいなくて、どこか他国をさ迷っていたので、アイギストスが、勇気を得て殺害したのか（三、二四三―二五二）という意味のことを尋ねるのである。つまりテレマコスは、一見、アテネが、神には遠くにいる男でも無事に帰国させる力がある（三、二三一）と言った言葉を無視し、人間は死すべきものだ（三、二三六―二三八）という意味のアテネの言葉のみをとらえて、父は死んだのだと言いオデュッセウスのことをすっかりあきらめ、アテネが言及したアガメムノンの死についてネストルに尋ねているようである。[9] しかし、テレマコスは、アテネによって徐々に潜在的な力を現わすようになり、自己の無気力を克服しているのであるから、三、二四〇―二四二は、テレマコスのこれまでのような単なるあきらめの言葉ではないと思われる。むしろこの言葉には、父親の死を覚悟し、悲しみをのり越えて、今後のことに対処しようというテレマコスの意気込みが読みとれるのではなかろうか。[10]

では、このように見ると、テレマコスが、その対処の第一歩としてネストルにアガメムメンの死について聞いたの

は、どう解釈すればよいのであろうか。[11] テレマコスのアガメムノンの死についての質問内容は、さきに紹介したとおりである。それを要約すると、アイギストスは、メネラオスがいなかったら、アガメムノンを殺害する勇気を得たのかと言うことである。つまり強い弟がいなかったから、弱い従兄弟が策略で強い兄の方を殺せたのかと尋ねているわけである。これをテレマコスの場合にあてはめると、強いオデュッセウスが帰国せず、故郷のイタカにはペネロペイアと横暴な彼女の求婚者たちがおり、彼自身も勇気を得て旅からやがて帰国する身であるから、彼も帰国の際求婚者たちに殺されるかも知れないのである。だから彼の立場は、アガメムノンに似ていると言えるだろう。したがって彼が無事に帰国し、アテネの「忠告」すなわち、求婚者殺害を実行するには、アガメムノン殺害の情況を尋ね、その轍をふまないようにしようと心がけるのも不自然なことではないと言える。つまり、テレマコスの質問は、求婚者たちが彼を殺害する策略を計画することもありうると配慮した知的なものと見なせるのではないか。[12]

## Ⅲ

ところで、このテレマコスの質問にたいするネストルの答えは、どういうものであろうか。ネストルは、まずもしメネラオスが、アガメムノンが殺された後、アイギストスに出会ったら、彼を殺し、埋葬もしなかったろうし、女性たちは誰も彼のことを嘆かなかったろう。「彼はまったくひどい犯罪（mega ergon）を企んだのだからな（三、二六一）」と（三、二五四―二六一）述べている。すなわちネストルは、アガメムノンが殺害されたとき、メネラオスは帰国していなかった故、アイギストスがアガメムノンを殺害するという恐ろしい犯罪を企むことができたのだと事件の大筋を語っているのである。このことは三、二三四―二三五のアテネの言葉およびテレマコスの質問三、二四三―二五二を

前提として述べていると思われる。したがってネストルの言う **mega ergon** とは、アガメムノンの殺害そのものを指しているのではなく、アイギストスとクリュタイムネストラの策謀による悪らつなアガメムノンの殺害を指していると言えるだろう。[13]

そこでネストルが、なぜアイギストスとクリュタイムネストラがこのような殺害を企てることになったのかという説明をするのも自然の成り行と言える。彼は、われわれ（ギリシアの将兵たち）がトロイアで激しく戦っている間に、アガメムノンがクリュタイムネストラを守るように言いつけておいた歌人を、アイギストスが無人の島へ連れ出して殺し、クリュタイムネストラを誘惑していたこと（三、二六二―二七五）を述べている。すなわちネストルは、ギリシア軍のトロイア遠征中に、アイギストスはふらちにもクリュタイムネストラを誘惑してしまったと言って、その結果二人がアガメムノン殺害を企むことになったことを示唆していると見てよいだろう。したがってネストルが、誘惑そのものがアイギストスの目的であったとしても、それがアガメムノン殺害の前提となり、殺害とは切り離せないものとして、誘惑を **mega ergor**（三、二七五）と言っているのも理解できよう。[14]

このあと、ネストルは、メネラオスのことについて語り、彼の船団がマレイア岬で嵐に会い、船団は二つに分かれ、一方はクレタの近くで難破したが乗員は助かったこと、他はメネラオスとともにエジプトに流され、異国を漂流していたことを述べ、その間にアイギストスがこの悲惨な破滅（**tauta lugra** 3,303）を企んだこと、[15] また彼がアガメムノン殺害後七年間ミュケナイに圧政をしいたこと（三、二七六―三〇五）を語っている。つまりネストルは、なぜメネラオスが祖国に帰れず、長年漂流することになったかを述べ、彼が、アガメムノン殺害の際に不在であった故、アイギストスが **tauta lugra** を企んだ事情を納得のいくように説明しているのである。またこのようなアイギストスで

あるから、七年間ミュケナイ人を抑圧していたのも当然のことと思えるだろう。しかも以上のネストルの話は、オレステスが父の復讐をし、アイギストスを殺害するのにも、メネラオスが間にあわなかった（三、三〇六―三一二）ことの説明になっていると言える。と同時に、オレステスの復讐を述べていることは、彼を手本にしてたとえ一人でも勇敢に求婚者たちに対処するようにという意味の警告にもなっていると見てよいだろう。それ故ネストルがテレマコスに財産や乱暴な求婚者たちを館において遠くに長くいてはいけない。彼らが財産を分配してしまうとテレマコスの旅も無駄になる（三、三一三―三一六）と言って、メネラオスのように遅れないよう早く帰国し、求婚者たちの横暴を許さないようにするようはげましているのも当然のことだろう。

だが、ネストルは、ここで、メネラオスを訪問するようにテレマコスに助言し、その理由として、彼は、鳥でさえ一年かかっても渡れない大海へと流され、帰国などとても望めない異国から近頃帰ってきたうえ、思慮深く偽りを言わぬ男である（三、三一七―三二八）ことをあげている。ところがここで、ネストルが、一方で長い間家を留守にしていてはいけないといい、他方でメネラオスを訪問するようにと助言しているのがおかしいという疑問もおこるだろう。そもそもテレマコスがピュロスとスパルタを訪ねる目的は、オデュッセウスの消息を尋ねることであり、またこの忠告を与えているアテネの意図は、テレマコスが名誉を得ることにあるのは、すでに述べたとおりである。だから、ネストルがオデュッセウスの消息を知らなければ、テレマコスは自分でスパルタへ行き、そこでまた名誉を得てアテネの意図にそえばよいのであって、テレマコスに早く帰るようにとすすめるネストルが、わざわざ指図する必要のないことであるという異論がだされてもやむを得ないだろう。

しかしこれまでのテレマコスとネストルの対話をもう一度見れば、父の消息を尋ねるテレマコスに、自分が最初に

帰国した事情を述べて、何も知らないのだといい、帰国して聞いたことをつたえ、とくにオレステの復讐をたたえたのにたいして、テレマコスが、アガメムノン殺害の事情を尋ねると、ネストルは、アイギストスのクリュタイムネストラ誘惑とメネラオスの漂流を述べ、メネラオス不在の間のアイギストスによるアガメムノン殺害の企み、オレステスの復讐、メネラオスの帰国を述べ、さきに述べた、家を長く留守にしてはいけないという助言を与えると同時にメネラオスを訪問して話を聞くようにすすめているという展開になっている。つまりネストルは、テレマコスがスパルタへも行くという目的を持っているのを知らないのだから、彼の方から、まずオデュッセウスの消息について一番最後に帰国したメネラオスに聞くのがよいとテレマコスにすすめるのは当然のことと思われる。しかもピュロスからスパルタへは陸路で二日行程（三、四八一―四九七、四、一）であり、海路をとるなら（三、三二三）船でペライへ行き、そこから陸路スパルタへむかうことになるのだろうが、その行き方をしてもあまり日数はかからなかったと推測してよいだろう。したがってメネラオスを訪問するのをすすめていることは、この点からもネストルの家から長い間遠くはなれていてはいけないという言葉とは矛盾していないと言える。[16] つぎにテレマコスがアガメムノンの死について（三、二四九―二五〇）尋ねたのに、十分な返答をしていないという批判がある。[17] たしかにこの批判は当っているだろう。しかしアイギストスがアガメムノンにたいしてどのような破滅を企み、またアガメムノンがどのような殺され方をしたのかは、当事者がすべて死んだ以上は、詳細な事実がわからないのもやむを得ないことだろう。それ故、伝聞でしか知らないネストルが、クリュタイムネストラの誘惑やメネラオスの漂流についてはかなり詳しく述べることができても、アガメムノン殺害そのものについては、アイギストスが mega ergon あるいは tauta lugra を企んだとしか答えられなかったのも仕方のないことであろう。そこでネストルは、アガメムノンの弟であり、オレステスの叔

父であるメネラオスなら、あるいは自分より詳しくアガメムノン殺害について語れるかも知れないと思い、この点をも含めてテレマコスにスパルタへ行くよう助言したと見なしてもよいのではなかろうか。

以上のように見てくると、オデュッセウスの消息とアガメムノンの死に関するテレマコスの質問にたいするネストルの返答およびメネラオス訪問の助言は、オレステスを手本にするようにというはげましとともに、筋の展開から見てけっして不自然なものではなく、むしろ聴衆に、カリュプソのもとにいるオデュッセウスについて、またアガメムノン殺害についてメネラオスがどのようにテレマコスに述べるかという強い関心を抱かせる見事な構想を作者はしめしていると言えるのである。

## Ⅳ

さて、ネストルがテレマコスにメネラオスを訪問するように助言するのを聞いたアテネ＝メントルは、ネストルが至極当然のことを述べたといい、ポセイドンおよびその他の神々に酒を注いで犠牲を終え、家に帰るようながす(三、三三一―三三六)。するとネストルらは、アテネの言葉にしたがって犠牲を終え、アテネとテレマコスは船へ帰ろうとした。だがネストルは、二人が、とりわけオデュッセウスの息子テレマコスが自分の家に泊まるようにと強く主張した。これにたいして、アテネは、ネストルの言葉を当然なこととし、テレマコスはそこに泊まり、自分は乗員に命ずることがあるので船に帰り、翌朝カウコン人のところへ行くが、テレマコスにはネストルの息子をつけて馬車でスパルタへ行かせてほしいと頼むと、尾白鷲に変身して去った。これを見たネストルは、驚いて、テレマコスに、メントルは女神アテネであなたを守っているから、あなたは臆病者とはならないと言って、牝牛を犠牲に捧げることに

する（三、三五六―三八四）。そして翌朝ネストルは、アテネの慈悲を願う（三、四一九）ために、息子らに皆の者を集めさせて犠牲の用意をさせる。するとアテネも犠牲をうけにやってきた。ネストルたちは犠牲の式をあげ、アテネに祈った。犠牲の宴が終ると、ネストルは、馬車の用意をさせ、息子ペイシストラトスを案内人としてテレマコスを旅立たせた。二人はペライで一夜をすごし、次の日の晩スパルタに着いた（三、三八五―四九七）。

以上、ネストルがテレマコスにスパルタ訪問を提案したのにたいし、アテネがそれを受け入れ（三、三三一）たあと三歌の終りまでの場面を簡単に見てきた。ここでまず言えることは、ネストルの提案が彼の立場からして当然であることはすでに述べたとおりであるが、アテネがこの提案を受けいれているのも、彼女の意図から見てまた当然のことであり、しかもこの応答は、筋の展開上きわめて自然になされていることがわかる。ところでアテネ＝メントルが船にもどる際、尾白鷲に変身し、それを見たネストルが、メントルをアテネだと言って、犠牲をささげる様子を詳しく述べているのにはどういう意味があるのだろうか。この疑問については、分析論者がポセイドンへの大きな犠牲とアテネへの小さな犠牲を比較し、それを不自然だと批判しているが、統一論者でも、ネストルの敬虔さ、犠牲の美化、すべての者が参加していることなどは、宗教的献身さをしめしているにすぎないというような解釈をしたりしている。[18] だが分析論者の批判はさておきはたして後者が述べているような意味で犠牲がささげられたのであろうか。

一、三一九―三二〇において、アテネ＝メンテスが鳥のように去って行ったとき、テレマコスは、メンテスは神であったのかと驚いたが、三、三七一―三七二でも、アテネ＝メントルが尾白鷲に変身したとき、その場に居合せた者はすべて驚いている。しかしネストルのみは、メントルをアテネと見抜き、彼女をテレマコスの守護神と言う。この能力は、トロイア出発の際におけるアテネのギリシア軍にたいする怒りを予知した彼の能力と一致している。したが

ってネストルがアテネに犠牲をささげ、一家の幸運を祈ろうとするのも無理のないことであろう。ところでこのあとネストルの館にもどってアテネに酒をささげる様子、さらに翌朝における犠牲の模様がながながと（三、三八五―四七二）描写されている。たしかにそこにはネストルたちの敬虔さがしめされている。だが、そのためだけに長い犠牲の描写がなされているのだろうか。この場面においては、夜はアテネに酒をささげたあと、テレマコスと一緒にネストルの息子でただ一人独身のペイシストラトスを寝させていること、また翌朝では、ネストルの息子たち、エケプロン、ストラティオス、ペルセウス、アレトス、トラシュメデスそれにペイシストラトスがテレマコスをつれてネストルのまわりに集まり、さらにテレマコスの船の乗員も呼ばれ、ネストルと息子たちによって犠牲の牛が倒され、ネストルの妻エウリュディケや娘たち、嫁たちが叫び声をあげる様子、また儀式どおりに肉が切り取られ、串にさされて焼かれる間に、[19] テレマコスがネストルの末娘ポリュカステによって入浴させられているのを見ると、ネストルの一家が犠牲に参加し、ネストルと息子たちがそれぞれ儀式の役割を受けもっていることがわかるだろう。ということは、この場面ではたんにネストルの敬虔さがしめされているだけでなく、犠牲の描写が詳細に述べられるにしたがい、老王ネストルが、さきに名をあげた多くの息子たち、それに娘たちや嫁たちと一緒に幸福にすごしていることが同時にあきらかにされていると言えるだろう。

## V

ピュロスを出発したテレマコスは、ペイシストラトスとともに、二日目の晩スパルタに到着した。そこでは、メネラオスの館において、彼とヘレナの娘ヘルミオネがネオプトレモスに嫁ごうとしており、一方メネラオスと奴隷女か

ら生まれた息子メガペンテスに嫁をむかえようとしているところであった。近隣からは人々が招待され、賑やかな宴会が催されていた。二人が館の門に馬をとめると、メネラオスの従者エテオネウスが、メネラオスに二人の客人を迎えてよいかどうか尋ねた。メネラオスは、客人を宴に案内するよう命じ、二人が食事した後彼らの素性を尋ねることにする。ここでテレマコスは、食事をしながらペイシストラトスに、ゼウスの宮殿のようなメネラオスの館の豪華さに驚きの言葉を述べている（四、一―七五）。

以上が四歌の冒頭の場面であるが、これを見てまず感じることは、メネラオスの娘と息子の結婚式が豪壮な宮殿で、近隣の人々を大勢集めておこなわれているにもかかわらず、そこに淋しさが漂うていることである。というのは、三歌の末尾において、ネストルが、多くの息子や娘それに嫁たちと一緒に犠牲をささげている様子とくらべると、結婚式がいかに華麗であろうとも、メネラオス一家の構成員が貧弱なものであることがわかるであろう。またこのことは、ペネロペイアとテレマコスしかおらず、求婚者たちがのさばっているオデュッセウスの館を思いおこさせる。この点三歌末尾のネストル一家の描写は、四歌冒頭のメネラオス一家の情況、すなわち彼とヘレナの間に生まれた娘を嫁がせ、彼と奴隷女にできた息子に嫁を迎えるという複雑な家庭の事情、ひいては一、二歌におけるオデュッセウス一家の状態と見事な対照をなしていると言える。[20]

しかしメネラオス一家に漂う淋しさは、このような、彼の家庭の事情だけによるのではない。それは、メネラオス自身の心にも原因があるのである。

テレマコスがメネラオスの宮殿の荘麗さに驚いているのを耳にしたメネラオスは、自分はキュプロス、フェニキア、エジプト、エティオピア、シドン、エレムボス人の土地を漂流し、多くの財宝を集め、八年目にトロイアから一

番最後の将軍として帰国したが、このような財宝を所有して、当地を支配しながら、すこしも喜んでいないといい、妻のヘレナと財宝を奪われるという苦しみをうけ、漂流の間には兄のアガメムノンが妻のクリュタイムネストラの奸策で殺害され、トロイアでは三分の一の勇士が戦死し、とりわけオデュッセウスの生死が不明であり、家族のラエルテス、ペネロペイア、テレマコスが嘆いていると思われることが自分の心を悲しませる原因だと述べている（四、七八―一一二）。つまり彼は、ヘレナと財宝を奪われるという災厄の結果、兄を殺され、戦友を失い、とくに彼の友オデュッセウスが生死不明の状態にあるという悲しい目にあっているのだから、いかに豊かに暮していても楽しくはないと言っているのである。また子供も、娘のヘルミオネと奴隷女との息子メガパンテスのみであり、それもヘルミオネが嫁ぎ、メガパンテスに嫁をとるという事情は、結婚という本来目出たいことが、彼をかえって淋しくかつ心苦しくさせていると推測できるのではなかろうか。

したがって「この財宝を喜ばずに支配している（四、九三）」というメネラオスが、その理由を説明することにより、オデュッセウスの生死不明を悲しんでいると述べるようになった（四、七八―一一二）のも自然な成り行きと言えるだろう。一方、豪華な宮殿に住みながらも喜べない事情をメネラオスから聞いたテレマコスが、自分の館と自分の置かれた立場をあらためて思い知らされ、しかも父親オデュッセウスの名を聞き、彼の生死が不明であると知ると、父のことを嘆き、涙をながした（四、一一三―一一六）のも当然のことだろう。

## VI

このテレマコスの様子を見たメネラオスが、テレマコスに、彼の父親の名をどうして聞きだしたらよいか思案して

いるところへ、ヘレナが侍女たちを従えてきて、テレマコスを見ながら、彼はオデュッセウスの息子に非常によく似ているから、彼の息子テレマコスであるに違いない（四、一四一―一四六）と言った。このヘレナの言葉を聞いてメネラオスも、テレマコスがオデュッセウスに似ているし、オデュッセウスが自分のために苦労してくれたことを話すと、彼が涙を流した（四、一四八―一五四）と述べる。するとペイシストラトスが、メネラオスが話しているときに言葉をはさむのを失礼と思い黙っていたが、彼がオデュッセウスの息子であり、自分がネストルの息子で、彼を案内してきたが、それは、彼の父親が留守で家にふりかかる災厄を防いでくれるものがいないから、メネラオスの忠告と助言を聞くようにと、自分の父親が寄越したのだ（四、一五六―一六七）と言う。[21] ところがメネラオスは、ペイシストラトスの助言を求める言葉に直接返答せず、オデュッセウスが帰国していれば、アルゴスに町を与えて彼と親交を結んでいたのだろうが、神はそれを許されなかったようだと言うと、その場に居合わせたヘレナ、テレマコス、ペイシストラトスらは泣き、メネラオス自身も涙をながした。しかしペイシストラトスは、トロイアで戦死した自分の兄アンティロコスを思い出し目を涙でぬらしながらも、悲しみをこらえて、ネストルの息子である自分の言うことにしたがってほしいと述べ、自分も兄を失ったが、食事の時に泣くのは嬉しくないことだ（四、一八三―二〇二）と述べる。[22] そこでメネラオスは、ペイシストラトスの言葉を、すぐれたネストルの息子にふさわしいことだとほめ、嘆くのをやめて、食事をし、明朝テレマコスとたっぷり話すことにしよう（四、二〇四―二一五）と言う。

このメネラオスの言葉に応じて、ヘレナは、怒り、苦痛、悲嘆を忘却する薬を酒に入れ、一同が楽しく話すようにいい、彼女みずから、乞食に変装したオデュッセウスがトロイアの町に潜入したのを、彼女だけが見破り、彼がギリシア軍の陣営にもどるまでトロイア人にもらさないと誓って、ギリシア軍の計略を聞き、彼がそのあと多くのトロイ

ア人を殺害してトロイアの情報を持ち帰ったという彼の大胆で緻密な行動を述べ、一方彼女もすでにギリシアに帰りたい気持になっていたことを打ち明ける(四、二二九―二六四)。するとメネラオスも、オデュッセウスほど忍耐強い男を知らないといい、オデュッセウスとともにギリシアの勇士たちが、木馬の腹中に潜んでトロイア城内にひき入れられたとき、ヘレナが勇士たちの妻の声音で勇士たちの名を呼んだので、メネラオスとディオメデスが返事しようとしたのを、オデュッセウスがとどめ、さらに他の者たちが黙っていたのにアンティロコスだけが返事しようとしたので、その口を手で押えて、ギリシア人たちを救った(四、二六六―二八九)とオデュッセウスをほめた。だがヘレナとメネラオスの言葉も、テレマコスにとっては、すでに亡くなった父オデュッセウスにたいする賛辞にすぎないと思われたようである。だから彼は、このようなオデュッセウスの「鉄の心」(四、二九三)も破滅を防げなかったのだから、なおさら悲しいと言い(四、二九一―二九四)、眠りにつく許可をメネラオスにもとめた(四、二九四―二九五)。そこでヘレナは、寝床を広間の廊下にしつらえ、テレマコスとペイシストラトスは眠りにつき(四、二九六―三〇三)、メネラオスとヘレナは宮殿の奥で眠った(四、三〇四―三〇五)。

以上のように四、一一三―三〇五を見てくると、まず、人間の幸福という一般論から個々の具体的な場合が述べられ、最後に主人公オデュッセウスが話題の中心になり、それに関連してペイシストラトスにより、テレマコスのスパルタ訪問の目的が述べられると同時に、一同が悲しみを止めるよう提案されているのは、自然な筋の展開であると言えるだろう。またアテネによって知恵にすぐれたネストルに、彼の息子の一人をテレマコスの案内役としてつけるよう申し出られ、それをうけいれたネストルにより案内役としてつけられたペイシストラトスが、このような重要な役割を冷静にはたしているのも三歌との関連から納得できるだろう。そしてペイシストラトスの提言にメネラオスも同

意して、翌朝テレマコスと話をし、その晩は楽しく食事をすることにする。ヘレナもそれに助力して、オデュッセウスの未帰国を悲嘆するのではなく、逆にオデュッセウスの知恵、忍耐、意志、勇気においてすぐれた点を彼女の体験から讃えて皆の気持を楽しくしようとするのである。またこれに応じてメネラオスも、意志の強さにおいてやはり彼の体験から讃えているのである故、四、二一九―二八九は、その前の場面との関係から見てけっして不自然なことではなくかえって有機的な関連をもっていると言えるだろう。[23] それと同時に作者は、「イリアス」以後のトロイアにおけるオデュッセウスの活躍を聴衆に語ろうとする意図があると推測できるだろう。またこのように見れば、テレマコスとメネラオスの対話がのびたのは、自然な成り行きであるばかりでなく、テレマコスの目的がはたして達成されるのかどうかという不安を聴衆に与える作者の巧みな手法が窺えるのではなかろうか。

## Ⅶ

さて翌朝になると、メネラオスがみずから、テレマコスのところにやってきて、スパルタに来たテレマコスの目的をたずねる。これにたいしてテレマコスは、父オデュッセウスの消息を聞くために来たのだと述べ、イタカの館における求婚者たちの横暴を語り、オデュッセウスの悲惨な最後を教えてくれるようにと、またもや悲観的な気持でメネラオスに頼むのである。

するとメネラオスは、求婚者たちにたいする激しい怒りを述べ、オデュッセウスが求婚者たちにあえば、彼等をたちどころに倒してしまうだろうにと言い、予言者である海の老人プロテウスから聞いたことを話す。メネラオスの話す順にしたがってその概略を述べると、まず彼が部下たちとともに、ナイル河口のパロス島に追風がなくてとどまっ

ていたとき、プロテウスの娘エイドテエに会い、ポセイドンの召使いであるプロテウスが帰国の方法を教えてくれるから、待ち伏せして捕えるようにと教えられ、彼女が教えたとおりにしてプロテウスを取り押えて、帰国の方法を聞きだす（四、三〇六―四七〇）。するとプロテウスは、ゼウスをはじめ他の神々に立派な犠牲をささげないと帰国できないと言う。メネラオスは、これを聞いたあと、アガメムノンとともに帰国した将兵たちの運命を尋ねた。するとプロテウスは、アイアスがポセイドンによって溺死させられたこと、アガメムノンは帰国したが、アイギストスの館に食事に招待され、部下たちとともに無残にも謀殺されたこと（四、五一二―五三七）、オデュッセウスがカリュプソの島にひきとめられていることを告げる。これを聞いてメネラオスは、心を打ちひしがれるが、神々に犠牲をささげて、無事帰国した（四、四七一―五八六）ということになる。

ところで分析論者たち、たとえばベーテ[24]やメルケルバッハ[25]は、本来はこの場面でオデュッセウスの運命が詳細に述べられていたと推定し、アイアスについては一三行（四九九―五一一）、アガメムノンに関しては二六行（五一二―五三七）であるのに、テレマコスの目的であるオデュッセウスの消息については、わずか六行（五五五―五六〇）であると批判し、改作者が削ったのだと主張している。その理由は、あとで九歌から一二歌にわたってオデュッセウスの冒険が述べられるために、プロテウスの彼に関する予言が短くされたということにあると見ている。しかし分析論の立場にたって以上のような見方をする人でなくとも、テレマコスの目的が、オデュッセウスの消息を尋ねることにあれば、メネラオスは、プロテウスの話として、オデュッセウスがカリュプソの島にひきとめられているとつたえればすむことではないかという疑問が生じるのも、やむをえないだろう。

しかし三歌におけるネストルの帰国物語に関して述べたように、ネストルは、オデュッセウスの消息を知らないと

言えばよいところを、詳しく彼等の帰国の事情を述べているが、これは、なぜ彼がオデュッセウスの消息を知らないかをテレマコスに理解させるために詳細に語らねばならなかったこと、つぎに聴衆にも彼等の帰国物語を聞かせるところに作者の意図があったからであると見なしうるだろう。さらに帰国してから知ったこととしてとくにアガメムノンの殺害とオレステスの仇討が述べられているのは、ネストルがテレマコスにオレステスを手本にして勇敢に行動するようはげまそうとしていると推測し得るだろう。これにたいしてテレマコスが、ネストルに、アガメムノンがアイギストスに殺された様子を尋ねているが、ネストルは、アイギストスがクリュタイムネストラを誘惑し奸計によって殺害し、七年間ミュケナイを支配したが、その間メネラオスは漂流しており、オレステスが仇を討ったときに、帰国したと述べているだけで、十分にテレマコスの質問に答えているとは言えない。そのかわり、ネストルは、メネラオスを訪問するようテレマコスにすすめていると思われるのである。

このようにネストルの帰国物語を理解したうえ、ネストルとテレマコスのアガメムノン殺害に関する対話を前提とすると、メネラオスによる詳細な彼の帰国物語、とくにプロテウスの話は、オデュッセウスがカリュプソの島にひきとめられているのを、テレマコスに理解させるために必要であること、同時に作者がアガメムノンとともに帰国した者たちの運命とメネラオス自身の漂流を聴衆に聞かせる意図をもっていることを推測させ得るだろう。さらにアガメムノンの殺害については、ネストルが十分に答えることができなかった部分、すなわちアガメムノン殺害の様子、弱いアイギストスが強いアガメムノンをいかにして殺害したかを、メネラオスがプロテウスの話によって補っている（四、五一二―五三七）と見るべきではなかろうか。[26]

以上のように見てくれば、三歌、四歌は緊密な関連をもっており、とくにネストルの話とメネラオスの話は、オデ

ユッセウスの消息をつたえるという前提のもとに、ギリシア軍の帰国物語を補完しあっていると言えるだろう。またアガメムノン殺害とオレステスの仇討が三歌においても四歌においても述べられており、このことは、一歌におけるオレステスを手本として求婚者たちを殺害せよというアテネの忠告と対応していると見なせるだろう。またテレマコスがオデュッセウスの消息を知る一方、アテネによって勇気づけられ思慮深くなった彼が、華麗な宮殿で英雄たちの行動、とくに父のすぐれた活躍を聞いて見聞をひろめたうえ、その言動によって好意を寄せられよい評判を得た故アテネの提案は達成されていると見てよいだろう。[27]

したがって三歌、四歌のネストル、メネラオスの話は、分析論者のいうような単なるギリシア軍の帰国物語として挿入されたのではなく、一歌、二歌と有機的な関連をもち、筋の展開において不可欠なものであると言えるだろう。しかも筋をこのように有機的に展開させながらギリシア軍の帰国をも聴衆に聞かせている作者の手法は、見事なものと思われる。

註

(1) 松本仁助「アテネの忠告」一、二七一—二九六、西洋典古学研究、四二頁以下、「テレマコスの奮起」一、三一九—四四四、同志社大学人文学、一〇一号一頁以下、「テレマコスの駆け引き」二、二〇九—二三三、同志社大学、人文学一一〇号、一頁以下。

(2) E. Schwarz, die Odyssee, München, 1924, 238

(3) E. Bethe, Homer, Dichtung und Sage, II, Leipzig und Berlin, 1929, 30. なお R. Merkelbach, Untersuchungen zur Odyssee, München, 1969, 53 は、「テレマコスの旅」の作者は、「原形のオデュッセイア」を知っていて、後者とおなじような方法で「ギリシア軍の帰国」を利用したと見ている。また D. Page, The Homerie Odyssey, Oxford, 1955, 179 は、「テレマコス物語」は「オデュッセイア」を前提とした独立の物語であるかも知れないと言っている。

(4) F. Klingner, Über die vier ersten Bücher der Odyssee, Ber. Verh. Sächs. Akad. Wiss., Phil.-hist. kl. 96, 1944, 1, 41ft.

(5) H. Eisenberger, Stndien zur Odyssee, Wiesbaden. 1973, 64. は、三歌のはじめのテレマコスは、二歌の勇気のあるテレマコスと矛盾しておらず、ただ異なった情況における彼の内気さを示していると見ているが、この点は、同意できる。Cf. Page, 173.

(6) この質問の内容は、ポリュペモスがオデュッセウスに尋ねたのとおなじである。九、二五二以下参照。

(7) 二、四〇以下参照。

(8) Eisenberger, 68, Anm. 14. の ephestios についての意見に同意するものである。

(9) Cf. Ameis-Henze-Cauer, Homers Odyssee, Anm. 232-235.

(10) Cf. S. Beßlich, Schweigen-Versweigen-Übergehen, Die Darstellung des Unausgesprochen in der Odyssee, Heidelberg, 1966, 49 ; Eisenberger, 68.

(11) Cf. Ameis. Anhang, 3, 248ff.

(12) 四、六二四以下参照。

(13) Cf. F Focke, Die Odyssee, Stuttgart-Berlin, 1943, 33 ; Beßlich, 30.

(14) Cf. Focke. 33. ; Beßlich, 50.

(15) 三、三〇三は、アイギストスが、メネラオスの漂流中に (tophra)、アガメムノン殺害を企てたという文脈になるようである。しかしアガメムノンは、メネラオスよりおくれてトロイアを出発し、ネストルよりもあまり遅くならずに帰国してすぐアイギストスに殺害された（三、一九三―一九四）のであるから、実際には、アイギストスはクリュタイムネストラを誘惑した後、アガメムノンが帰国するまでの間（具体的には一年間、四、五二四―五二九）ということになる。つまりメネラオスに関していえば、tophra というのは、彼の漂流の初期が、アイギストスの殺害計画の最後の期間（四、五二九）と殺害の時期（四、五三〇―五三七）にあたっており、メネラオスの漂流中というのではないのである。それ故、tophra というのは、とにかくメネラオスの留守中にという意味であり、tauta lugra はアガメムノンの悲惨な殺害を指しており、emēsato はこの殺害を企てたと解釈してよいだろう。Cf. Ameis, Anm. 303 ; Focke. 33 ; Beßlich, 50.

(16) Cf. Klingner, 43f.

(17) Cf. Beßlich, 52 ; Eisenberger, 69f.

(18) Cf. Eisenberger, 71.

(19) Ameis, Anm. 464.

(20) Cf. Eisenberger, 71.

(21) Schwarz, 308 ; U. v. Wilamowitz, Die Heimkehr des Odysseus, Berlin, 1927, 114 ; Bethe, 25f. ; Meikelbach, 42f. は改作者が四、一六三―一六七を挿入したものとしている。一方 U. Hölscher, Untersuchungen zur Form der Odyssee. Hermes-Einzelschriften 6, Berlin, 1939, 15f. ; Van der Velk, Textual Criticism of the Odyssey, Leiden 1949, 199ff. ; Eisenberger, 74 は四、一五八―一六〇を削除することを否定している。

(22) Cf. K. Reinhardt, Die Ilias und ihr Dichter, herausgeg. v. U. Hölscher, Göttigen, 1961, 377.

(23) J. Th. Kakrides, Homer Revisited, Lund, 1971, 40ff. では、四、二三五―二六四の挿話と四、二六六―二八九の挿話におけるヘレナの行動や後者におけるアンティロコスの行動の矛盾を指摘し、作者が異なった古い説話から借用したから矛盾が生じたと見ている。だが、ヘレナの心がトロイアからすでに離れている故、オデュッセウスの味方をしているのも、不審ではなく、一方、ヘレナはまだトロイア城中にいるのだから、木馬をためす行動をとったのもやむを得ないことだろう。Cf. Eisenberger, 77. Anm, 12.

(24) Bethe, 35f.

(25) Merkelbach, 51f.

(26) Cf. Klingner, 53ff. ; Reinhardt, 112f. ; Eisenberger, 81f.

(27) 四、六一一、一三、四二二―四二三参照。なお、四、六二三までと四、六二四以下および一三、四一二―四二八、一五、一一八四におけるテレマコスの帰国の申し出との関連、言いかえればテレマコスのスパルタ滞在についての統一論的解釈については、松本仁助「テレマコスのスパルタ滞在」西洋古典学研究XIX岩波書店、一九七一、一六―三〇参照。